人々のつながりに着目したまちづくり事業の活性化要因の解析　(2) まちづくり拠点「まちベンチ美濃太田ラボ」への適用と計画立案

龍田 成人[1]・牧野 玲子[2]・稲垣 優子[3]・菊池 拓也[4]・近藤 隆洋[5]・、加藤 慎康[6]・
楢木 隆彦[7]

[1]非会員　株式会社　豊田中央研究所(〒480-1192 愛知県長久手市横道 41-1)
E-mail:tatsuda@mosk.tytlabs.co.jp (Corresponding author)

[2]会員　株式会社　豊田中央研究所(〒480-1192 愛知県長久手市横道 41-1)

[3]非会員　株式会社　豊田中央研究所(〒480-1192 愛知県長久手市横道 41-1)

[4]非会員　合同会社　カモケンラボ(〒505-0005 岐阜県美濃加茂市蜂屋町中蜂屋 1327)

[5]非会員　合同会社　カモケンラボ(〒505-0005 岐阜県美濃加茂市蜂屋町中蜂屋 1327)

[6]非会員　合同会社　カモケンラボ(〒505-0005 岐阜県美濃加茂市蜂屋町中蜂屋 1327)

[7]非会員　株式会社　田園社会イニシアティブ(〒455-0823 愛知県名古屋市港区惟信町 2-16)

地方中小都市では、まちづくりに関わる人々は都市圏に比べ限定的であり、まちづくり事業の活性化のためには、関わる人々の間で多様なつながりを構築していくことが重要である。そこで、まちづくりに関わる人々の記録から、様々な属性(社会的役割/年代/性別)を持つ人々のつながりをネットワークとして可視化し、その変遷を、フィードバックできる手法を構築した。

この手法を、岐阜県美濃加茂市にあったまちづくり拠点「まちベンチ美濃太田ラボ」に適用し、来訪者日報から人々のつながりと活性化要因を解析し、まちづくり拠点に関わる人々にタイムリーにフィードバックした。

解析結果のフィードバックは、人々のつながりやその課題を理解しやすくし、構築すべき関係性やキーパーソンの抽出なども可能とした。また、フィードバックを含む一連のミーティングを経て実施した具体的な対策(来訪者インタビュー、原点回帰イベント等)は、新たなつながりの構築にもつながった。

Key Words: *community planning, revitalization factors, network analysis, people's connections*

1. はじめに

日本の人口推計値(各年 10 月 1 日)[1]は、ピーク時の 2008 年の 1 億 2,808 万 4 千人から、14 年間で 313 万 7 千人減少し、2022 年には 1 億 2494 万 7 千人になっている。特に 15 歳未満の人口は 1,450 万 3 千人と少なく、日本の人口の減少局面は当面続くものと思われる。

同時に、東京圏(東京都、神奈川県、埼玉県、千葉県)への人口集中も進んでいる。2022 年の住民基本台帳人口移動報告[2]によれば、他地域から東京圏への人口移動は、99,517 人の東京圏の転入超過で、図 1 に示すように、若年層(18～34 歳)の転入超過(122,693 人)の影響が大きく、東京圏への人口集中の主な要因となっている。特に、高校、大学の卒業年齢にあたる 18 歳、22 歳には転入超過の大きなピークがあり、進学や就職を機に他地域から東京圏への移動しているものと思われる。一方で、35～80 歳では、東京圏から他地域への移動する人の方が多く、東京圏の転出超過(21,985 人)になっている。ただ、若年層の転入超過に比べる

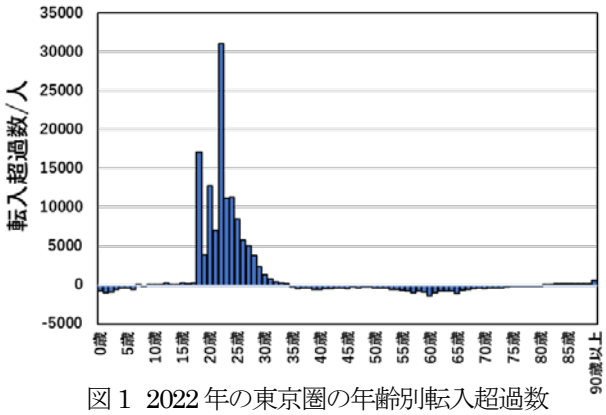


図 1　2022 年の東京圏の年齢別転入超過数
住民基本台帳人口移動報告[2]のデータより作成

と、18%程度に過ぎず、さらに多くの人々が東京圏から他地域へ移動することが人口集中の是正には必要である。

そのため、地方都市におけるまちづくりでは、進学や就職を機に地元を離れる前の若者も含めた形で、様々な属性人々をまちづくりに呼び込み、それらの人々の間に、多様なつながり、ネットワークを構築し、地域の魅力を若者に体験する場を提供していくことが重要である。

既に多数報告[3-8]があるように、まちづくりに関わる人々や組織のネットワークについての研究からは、ネットワークの形成過程[3,4]、それぞれの役割[5,6]、継続的なまちづくり事業の活性化要因[7,8]など、有益な知見を得られる。

さらに、比較的短期間で人のつながりの変化を解析できる方法を構築することは、まちづくり事業の進展とともに、様々な人々の間のつながりの変遷を可視化し、タイムリーに関係者間で共有し、関係者とともに対策を講じていくことを可能とする。

これまでに、日々記述される SNS の記事から、まちづくりに関わる人々のつながりをネットワークとして可視化し、その推移から、各まちづくり事業の活性化要因を解析する方法を報告した[9]。また、その結果、検討した事業では、多様な人材の協調、行政の継続的な関与、ビジョンで方向性を示すこと、持続可能な事業運営が活性化要因として重要な要因であることを示した。

本研究では、人々のつながりをネットワークとして可視化する手法を、若者と様々な関係者が関わって進められているまちづくり事業に適用し、まちづくり事業の進捗把握、活性化要因の解析、課題の把握を試み、その有効性を確認する。

また、これらの解析結果を、まちづくり事業に関わる人々にタイムリーにフィードバックし、まちづくり事業の現状把握と、課題抽出、対策の立案、実施を行った。

2 実験方法

(1) 対象事業

カモケンラボが、2020 年 8 月～2022 年 3 月まで、美濃太田駅南(美濃加茂市太田町)のまちづくり拠点「まちベンチ美濃太田ラボ(以下、まちベンチ)」で実施したまちづくり事業を対象事業とした(図 2)。

まちベンチは、まちづくりに関心を持つ人々が集うコミュニティスペースとして、2020 年 8 月末にオープンした。美濃太田駅周辺だけでなく、美濃加茂市および近隣地域からも、まちづくりに関心を持つ人々が集う場所となっていた。地域の食材をトッピングしたソフトクリームや飲料も販売し、それらを求めて、遠方からの訪れる人も多数いた。

2021 年 2 月からは、高校生などがチームを組んで、新作ソフトクリームを考案し、まちベンチでの販売を競う創作ソフト活動[10,11]が年 2 回のペースで実施された。また、2021 年 5 月からは、頻繁に訪れる来訪者からの要望に応える形で、軽音楽を楽しんだり、IT を学習したりする倶楽部活動が実施された。

まちベンチの運営は、カモケンラボの数名のスタッフがシフトを組み、常時 1～2 名がソフトクリームや飲料の提供を行った他、上記に示した種々の活動を、担当スタッフが実施する形で行われていた。

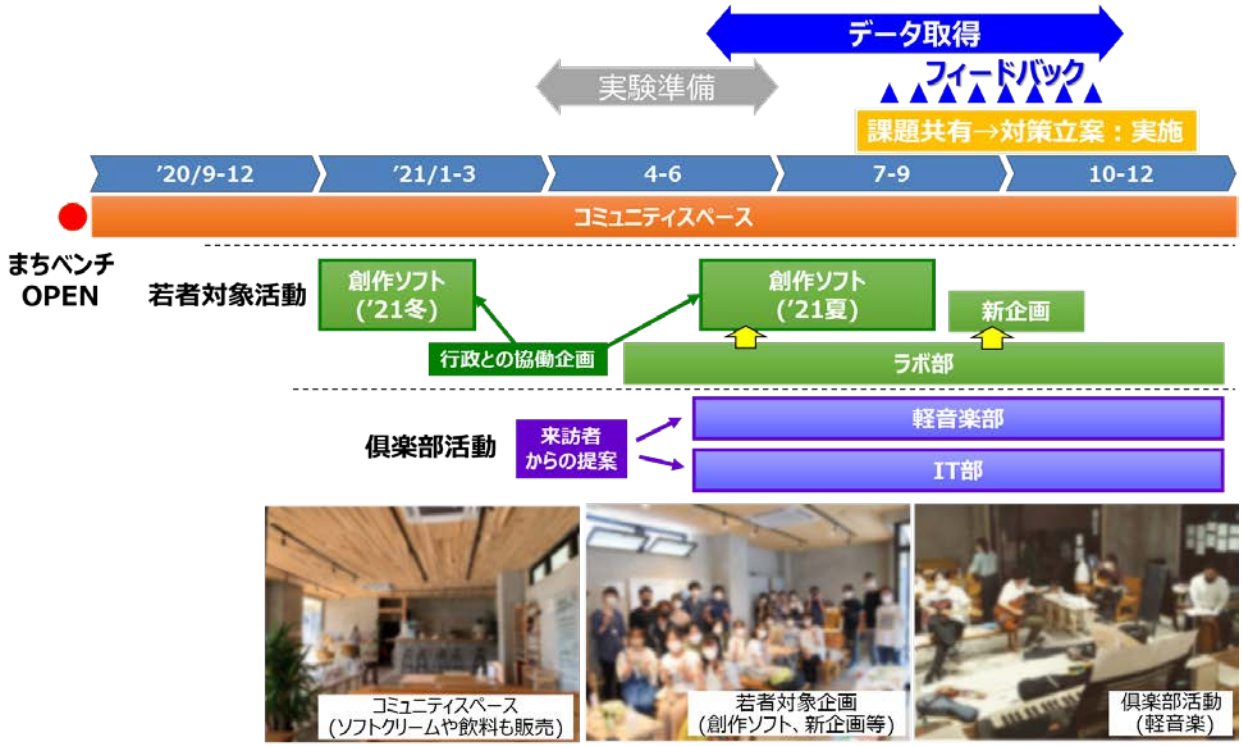


図 2 まちづくり拠点「まちベンチ」で実施されたまちづくり事業の活動内容

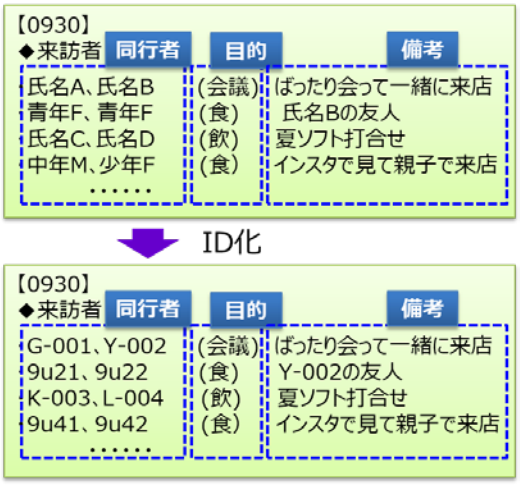
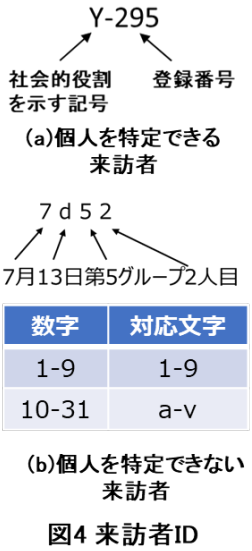


図 3 来訪者日報と ID 化



数字	対応文字
1-9	1-9
10-31	a-v

図4 来訪者ID

表2 来訪者の社会的役割と記号

記号	社会的役割
G	行政
Y	学生
L	社会人
N	無所属
P	個人事業主
R	飲食店
K	スタッフ
U	不明

(2) 実験スケジュール

2021 年 6 月 10 日～10 月 13 日までの 18 週間に、まちベンチを訪れた来訪者情報を解析対象とした。データの記録方法、ID 化方法、データの解析方法などを最適化した後、8 月中旬から 10 月末まで週 1 回のペースで、解析結果をまちベンチの運営スタッフにフィードバックした。また、9 月からは、解析結果を元に一連の打合せを通じて、まちづくり事業の現状把握と、課題抽出、対策の立案、実施を行った(図 2)。

(3) 来訪者情報の取得方法

a) 来訪者への周知

まちベンチに訪れる人々(来訪者)に「人のつながりとまちづくりの関係を可視化する調査」を知らせるポスタを、まちベンチの入り口とカウンターテーブルに設置し、調査の実施と入手した情報の取扱いを周知し、問い合わせには、まちベンチの担当スタッフが対応し、調査内容を詳細に説明した。

b) 来訪者日報

まちベンチを訪れる来訪者の関係性を把握するためには、来訪者が誰と一緒に、何の目的で、まちベンチを訪れたか、その際、何か特徴的なことが起きたかなどを把握する必要があった。もともと、まちベンチを運営する担当者には、来訪者を記録する習慣があったので、対象日、来訪者情報として、同行者、目的、備考を記述する来訪者日報(図 3)を記録することとした。備考にも、親子、親族、友人などの関係や、訪問の経緯などを補足的に記述し、来訪者間の関係の把握を試みた。

来訪者日報を解析するにあたり、来訪者を ID 化した(図 3)。個人を特定できる来訪者については、社会的役割に応じた一文字のアルファベット(表 2)と 3 桁の数字からなる来訪者 ID(図 4(a))で示し、個人を特定できない来訪者については来訪者 ID を図 4(b)に示す 4 桁の英数字で表した。

(4) 来訪者のネットワークの可視化

Python(ver.3.7.1)で自作したデータ抽出プログラムを用いて、来訪者日報から必要な情報(来訪日、同行者情報、来訪目的、備考)を抽出してデータベースを作成し、そのデータベースから特定の活動あるいは来訪者に関係するデータ群を特定した。そのデータ群から来訪者ごとに、来訪頻度と他の来訪者との同行関係(一緒に来訪、会議、作業などを行った関係)とその頻度(同行頻度)を抽出し、Gephi(ver.0.9.1)を用いて、関連する来訪者のネットワークを可視化した。

来訪者のネットワークでは、図 5 に示すように、来訪者を円(ノード)で示し、他の来訪者との同行関係を両者の円を結ぶ曲線(エッジ)で示した。来訪者の来訪頻度を円の大きさで、来訪者の社会的役割を円の色で示した。また、同行頻度を曲線の太さで示した。

(5) 課題抽出および対策立案

来訪者日報のデータ入手とその解析には 2 週間を要したため、2 週間前までのデータをもとに解析した来訪者のネットワーク解析結果を、8 月 25 日から 10 月 20 日まで、週に 1 回のペースでまちベンチの運営スタッフにフィードバックしながら、課題抽出と対策立案のプロセスを進めた(図 6)。特に、課題抽出および対策立案の討議では、解析結果を示した上で、相手の意見を取り込み、まとめるなど共創を意識した。

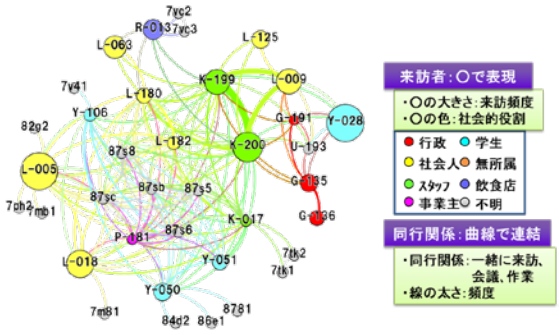


図 5 来訪者のネットワーク図の記述例

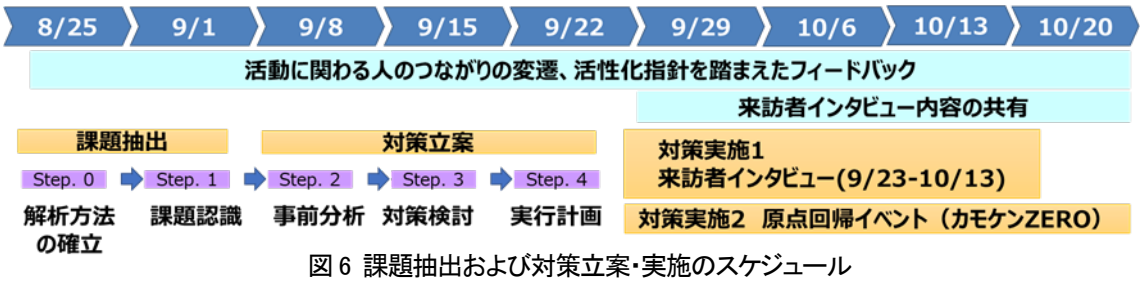


図 6 課題抽出および対策立案･実施のスケジュール

(6) 各対策の実施方法

対策立案の結果、来訪者インタビューと原点回帰イベントを実施することとなったので、その方法を以下に記述する。

a) 来訪者インタビュー

継続的に関わる来訪者を増やすために、既にまちベンチに継続的に関わっている 5 名(学生、個人事業主、行政職員、在住外国人、不動産業者)を対象に、以下の 4 項目と質問項目とした非構造化インタビューを実施した。

・まちベンチに関わったきっかけ
・まちベンチに継続的に関わる理由
・まちベンチの魅力
・まちベンチへの期待

b) 原点回帰イベント

様々なゲストと、まちベンチの運営に関わっていたカモケンラボの代表者やスタッフとの対談をオンライン、および、YouTube で公開し、多くの視聴者と共有した。

・第 1 回 2021 年 9 月 24 日(金) 19:00-21:00
・第 2 回 2021 年 10 月 22 日(金) 19:00-21:00

(7) 課題抽出･対策立案･実施による効果の確認方法

来訪者のネットワーク解析結果をフィードバックしながら行った課題抽出･対策立案･実施によって生じた新たなつながりや運営上の効果などについて、2021 年 11 月から 2022 年 3 月にかけて、まちベンチの運営スタッフと定期的にミーティングを行い、確認した。

3 来訪者のネットワークの解析結果

来訪者のネットワークの解析では、各活動に関わる来訪者の変遷から、活動の活性化要因や課題の把握を行う「活動の解析」と、特定の来訪者に関して他の来訪者との関りから、来訪者一人ひとりの関わりの変化を把握する「人の解析」を行った。

まちベンチは、主に、若者対象活動(創作ソフト活動および新企画)と倶楽部活動(軽音楽部および IT 部)が行われていた(図 2)。そこで、「活動の解析」では、まず、若者対象活動および倶楽部活動に関わる来訪者のネットワークを別々に解析し、活動ごとの来訪者の関わりを調べた。続いて、他の活動も含めた全活動に関わった来訪者のネットワークを解析し、活動間での来訪者の重なりを調べ、活動ごとの活性化要因の把握と、課題について考察した。

「人の解析」では、来訪頻度や他の来訪者との関わりが増加している来訪者、および、多くの活動に関わっている来訪者に注目して、その来訪者が関わる来訪者のネットワークを可視化し、その要因を考察した。

(1) 若者対象活動に関わる来訪者

a) 活動に関わった来訪者のネットワークの変遷

若者対象活動に関わった来訪者のネットワークの変遷を図 7 に示す。解析対象期間 6 月 10 日～10 月 13 日に行われた若者対象活動は、9 月 11 日に行われた新企画の打合せ以外はすべて、創作ソフト活動に関するものであった。

創作ソフト活動は、4 チームに分かれて、それぞれのチームが新作ソフトクリームを企画･販売する対抗戦の形で実施されていたが、2021 年の夏は、高校生の 2 チームの他、まちベンチに集う若者で構成されるラボ部と、市役所の職員がそれぞれ 1 チームずつの 4 チームが参加した。この他、行政職員、有識者などからなる運営メンバが活動を支えた。ネットワーク図では、それぞれのチームおよび運営メンバに関係する人の来訪者のつながりについて、それぞれの領域を色分けした。また、各チームでの企画メンバをオレンジ色の領域で示した。これにより、以下のように、創作ソフト活動の進捗に伴う来訪者の変化を可視化することができた。

1) 新作ソフトクリームの試作や広報スキルアップのワークショップが行われた 6 月 10～30 日のネットワーク図(図 7(a))には、ワークショップに参加した 4 チームの企画メンバが記述されている。
2) 7 月 1～21 日のネットワーク図(図 7(b))にも、試作ソフトクリームの販売の準備を進める企画メンバが記述されている。
3) 試作ソフトクリームの販売が始まった 7 月 22 日～8 月 11 日のネットワーク図(図 7(c))には、販売実習に参加する企画メンバが比較的大きな円が描かれており、来訪頻度が高くなっていることがわかる。これは販売実習に伴う企画メンバの来訪を反映したものと思われる。企画メンバ以外にも、多数の来訪者が創作ソフト活動のために来訪している。来訪者日報の備考欄の記述から、これらの来訪者の多くは、企画メンバの家族や、学校のクラスメイト、先輩、先生などの知人であることがわかった。
4) 引続き試作ソフトクリームの販売が行われた 8 月 12 日～9 月 1 日のネットワーク図(図 7(d))にも企画メンバの他に多数

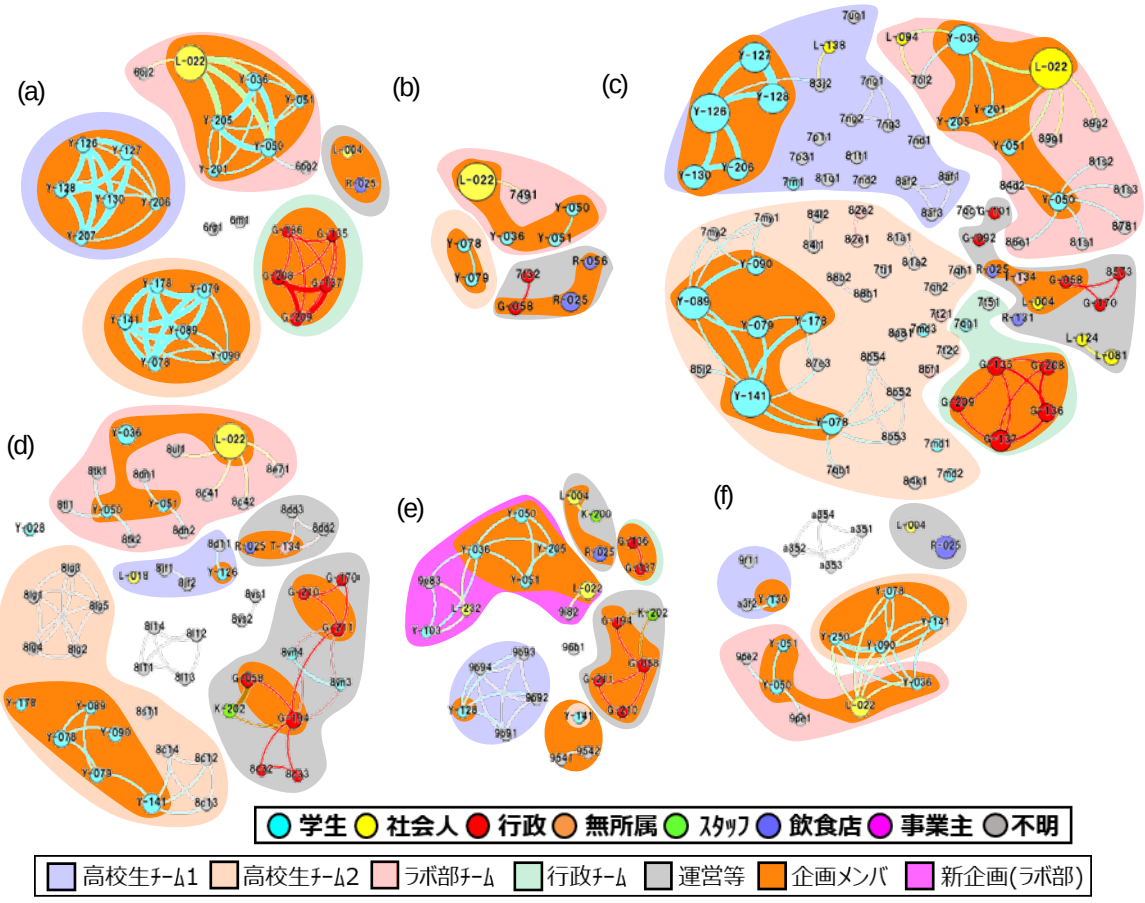


図 7 若者対象活動に関わった来訪者のネットワーク図の推移
(a) 6/10–6/30, (b) 7/1–7/21, (c) 7/22–8/11, (d) 8/12–9/1 (e) 9/2–9/22, (f) 9/23–10/13

の来訪者が記述されている。これらの来訪者の多くも企画メンバの家族や知人である。

5) 試作ソフトクリームの販売がほぼ終了した 9 月 2～22 日のネットワーク図(図 7(e))には、創作ソフト活動では、若干の企画メンバとその知人、打合せのために訪れた行政職員も記述されている。新企画活動では、ラボ部のメンバの他、新企画で実施するカレーの販売の会場となる近隣施設の関係者も記述されている。

6) 9 月 23 日～10 月 13 日のネットワーク図(図 7(f))には、主に、報告会後に訪れた企画メンバが記述されている。

b) 解析によってわかったこと

1) 創作ソフト活動では、試作したソフトクリームの販売期間に来訪者が大幅に増大した。これは、企画メンバが販売を競う販売期間に、企画メンバだけでなく、メンバの家族や知人が来訪するためである。一方で、販売期間が終了すると、来訪者は大きく減少し販売期間以前の水準まで戻っており、販売期間に新たにまちベンチに訪れた来訪者をいかに定着させるかが創作ソフト活動の課題と思われる。

2) 新企画活動では、まちベンチの常設の若者チームであるラボ部のメンバだけが、創作ソフト活動から新たに実施する新企画活動に軸を移していることがわかった。

(2) 倶楽部活動に関わった来訪者

a) 活動に関わった来訪者のネットワークの変遷

対象期間である 6 月 10 日～10 月 13 日に、まちベンチでの倶楽部活動に関与した来訪者のネットワーク図を図 8 に示す。対象期間に実施された倶楽部活動には、軽音楽部と IT 部の 2 つの活動があり、ネットワーク図では、IT 部を薄紫色の領域で示され、それ以外のベージュ色および薄黄色は軽音楽部に関する来訪者を示した。

1) 軽音楽部では、K-200、K-202、L-009、R-013 の 4 名の参加頻度が高く、図 8 のいずれの図でも比較的大きな円で記述されている。軽音楽部はこれらの 4 人が中心となって、実施されていることが推定される。

2) 軽音楽部は、対象期間中に 36 回の活動が実施され、前述の 4 名も含め、全部で 34 名の来訪者が参加している。その属性も、学生、社会人、行政、無所属、カモケンラボスタッフ、飲食店、個人事業主、不明と多様であり、様々な人に参加を呼び掛けている効果が確認できる。

3) 軽音楽部では、8 月中旬以降(図 8(d)～(f))になると、上記の 4 名の他にも、L-180、L-081、Y-028、L-120、L-221 の 5 名の参加頻度が上がっており、軽音楽部の活動に定着してきたことが伺える。

4) IT 部に関わる来訪者は、いつも同じ 3 名(K-200、Y-036、P-073)で固定されている(図 8)。

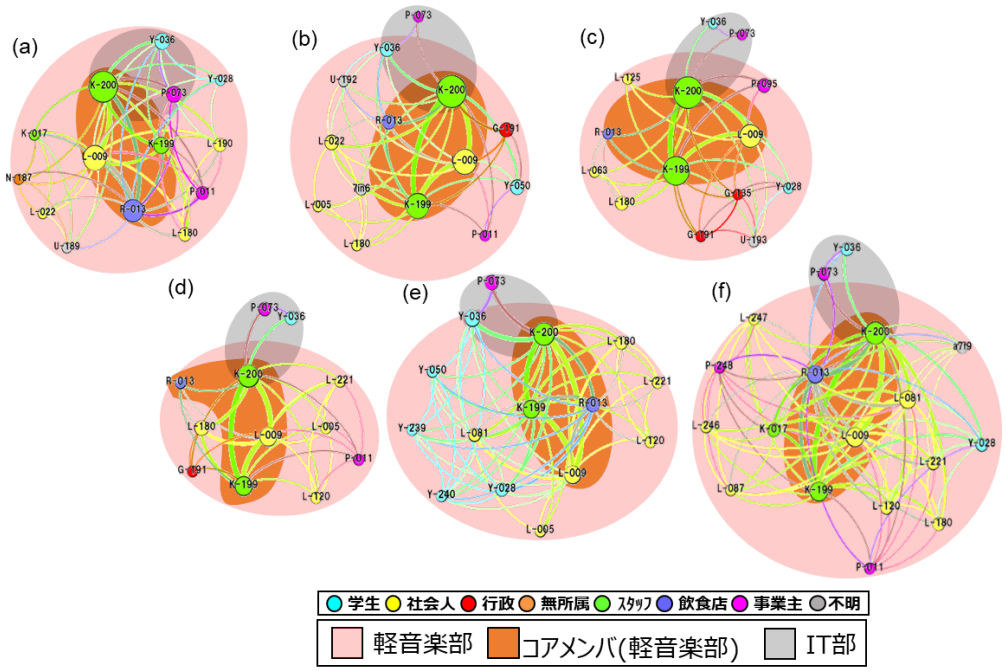


図 8 倶楽部活動に関わった来訪者のネットワーク図の推移
(a) 6/10–6/30, (b) 7/1–7/21, (c) 7/22–8/11, (d) 8/12–9/1 (e) 9/2–9/22, (f) 9/23–10/13

b) 解析によってわかったこと

1) 軽音楽部の活動には、様々な人が関心をもち、当初からの中心的に関わってきたメンバに加え、定着するメンバも現れている。来訪者からの提案を形にし、様々な人を誘い、参加しやすい環境づくりに心掛けている効果が表れている。

2) IT 部の活動への参加者は固定されており、他の人を巻き込めていないか、想定されていないものと思われる。

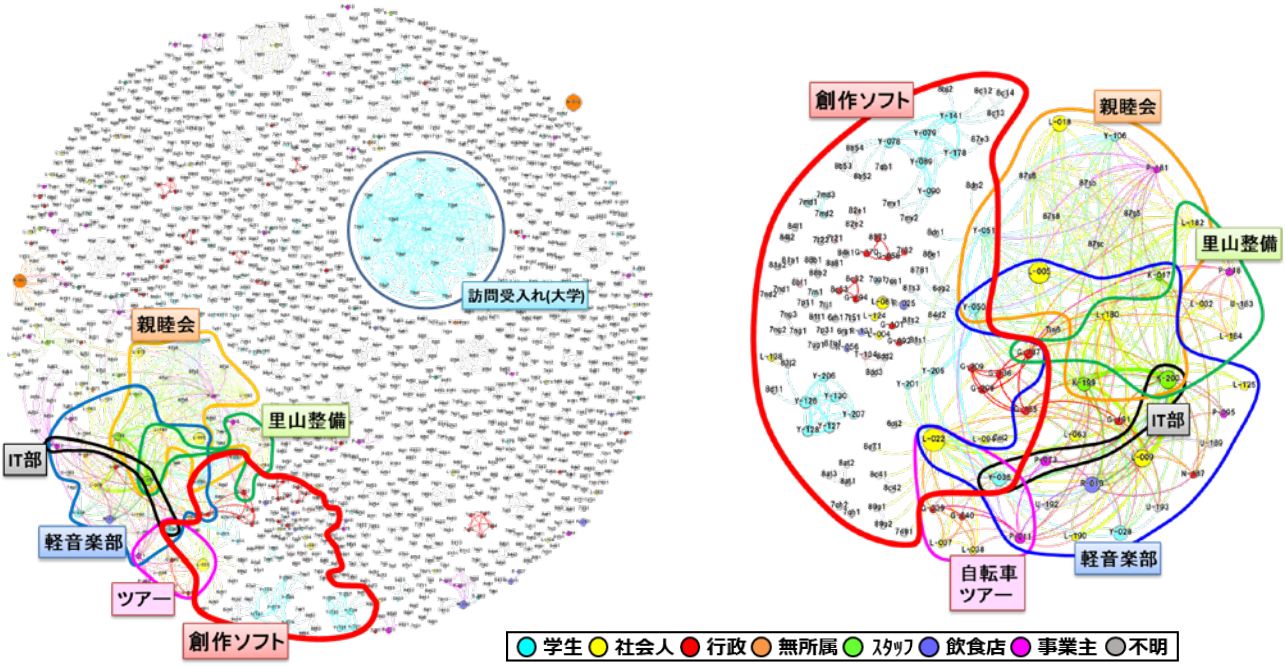
(3) まちベンチを訪れた来訪者全体

a) 来訪者全体のネットワークの可視化

対象期間である 6 月 10 日～10 月 13 日に、まちベンチを訪れた来訪者(1,574 名)のネットワーク図を図 9(a)に示す。それらの来訪者のうち、何らかの活動に参加した 148 名のネットワーク図を図 9(b)に示す。これらの結果から、以下に示すことがわかった。

1)全来訪者(1,574 名)のうち、個人を特定できた来訪者は 170 名で、1,404 名は個人を特定できなかった(図 9(a))。

2)まちベンチを訪れる来訪者の多くは、ソフトクリームや飲料



(a) まちベンチを訪れる全来訪者(1,574 名) **(b)活動に関係する来訪者(148 名)**

図 9 来訪者のネットワーク図(6/10–8/18)

の購入に訪れた来訪者である。一部の例外を除くと、これらの来訪者間のつながりはあまりない。

3)一方で、まちベンチでは、創作ソフト活動、軽音楽部をはじめ様々な活動が実施されており、それぞれの活動に多数の来訪者が参加している。これらの来訪者間は曲線で結ばれているものが多く、つながりが発達している(図 9(b))。

4)創作ソフト活動に関わる来訪者は 111 名と多いが、他の活動に関わったことのある来訪者も 6 名しかいない。また、6 名のうち 4 名は、以前からまちベンチと関わりのあるラボ部のメンバで、創作ソフト活動をきっかけに、他の活動に参加した来訪者は 2 名と少ない。

5)一方、軽音楽部、IT 部、親睦会、里山整備会議の活動に関わる来訪者数は、それぞれ、24 名、3 名、16 名、8 名と創作ソフト活動に比べると個々には少ないものの、それぞれの活動に関わる来訪者は相互に重なっており、つながりを示す曲線も活動を越えて拡がっている。

b) 解析によってわかったこと

1)まちベンチを訪れる来訪者間のつながりは、自然発生的なものよりも、活動がきっかけになったものが多い。来訪者に対して積極的な働きかけを行わないと、来訪者間のつながりが醸成されにくい。

2)創作ソフト活動に関わる来訪者は多いものの、この活動をきっかけに他の活動にも参加する来訪者は少ない。他の活動への参加が進むように意識的な働きかけが重要と思われる。

3)創作ソフト活動以外の活動では、それぞれの活動に関わる来訪者は相互に重なっており、顔見知りを通じてつながっている。

(4) 関わりが良好な変化を見せる来訪者の解析

a) 個々の来訪者に関連するネットワークの変遷

来訪頻度や他の来訪者との関わりが増加している、多くの活動に参加しているなど、まちベンチとの関わりが良好な来訪者を特定し、関係するネットワークの変遷を調べた(図 10)。

1) Y-028 は当初週 1 回程度の来訪であったが、軽音楽部に参加し、日中に飲食でコミュニティスペースを訪れることで知り合いが増え、ほぼ毎日来訪するまでになった(図 10(a))。

2) L-081 は以前から週 1、2 回程度まちベンチに立ち寄っていた。9 月中旬からは軽音楽部に参加するようになり、来訪頻度も増えている。他の来訪者と連れ立って食事に行くなど親交が深まっていく記述も見られた (図 10(b))。

3) N-012 は以前から高い頻度(週 5 日以上)でまちベンチに通う常連客であったが、7 月中旬までは他の来訪者との関わりはほとんど記述されていなかった。8 月上旬から徐々に他の来訪者と交流する様子が記述され、10 月には特技を活かしてハロウィンの際にメイクを担当し、多くの人と交流するようになった(図 10(c))

4) P-011 はまちづくりに関心があった。まちベンチから依頼した EC サイトの打合せだけでなく、軽音楽部や自転車ツアーなど様々な活動に参加していた(図 10(d))。

5) Y-036 も、まちづくりに関心があり、まちベンチの常設の若者チームに応募したラボ部に応募した学生である。創作ソフト活動、新企画、IT 部、軽音楽部、自転車ツアーなど様々な活動に参加していた(図 10(e))。

b) 解析によってわかったこと

1) 来訪者日報および属性対応表から作成したデータベースから、個々の来訪者が含まれるデータを抽出してネットワークを図示することで、個々の来訪者の関わりの変化を可視化することができる。

2) 居心地の良い安心・安全なコミュニティスペースの提供、他の来訪者とともに音楽を楽しめる軽音楽部の紹介が、来訪頻度を上げたり、来訪者間の交流を促したりするのに有効であると考えられる。

3) 多くの活動に参加しているキーパーソンを抽出することができる。

4. 課題抽出と対策立案

(1) 課題の共通認識

9 月 1 日に行われたミーティングで、まちベンチの運営スタッフに、前章での解析結果のうち、6 月 10 日～8 月 11 日までの来訪者のネットワークの推移をフィードバックし、まちベンチの運営スタッフとともに、まちベンチの課題について議論した。その結果、以下のように課題の共通認識を得た。

1) まちベンチは多数の運営スタッフがシフトを組んで実施されており、自分の担当日以外の来訪者の来訪状況について知らないケースが多々あった。来訪者のネットワークが可視化され共有されたことで、担当スタッフが、来訪者間のつながりの全体像(図 7, 8, 9)が意識できる。

2) まちベンチの運営スタッフ間で、スタッフの働きかけや活動などをきっかけに、まちベンチに深く関わる人が増え、複数の活動に関わっている人もいる(図 10)。

3) 創作ソフト活動では、多くの来訪者が初めて参加している(図 7)が、これをきっかけに、他の活動に参加しているケースは少ない(図 9(b))。また、創作ソフトを企画した 4 つのチーム間の交流もなく(図 7)、他者とのつながりに発展させる試みも十分とはいえない。

4) 創作ソフト活動などでまちベンチの活動に初めて関わった人に、継続してまちベンチに関わってもらうこと、新たな人のつながりを作ることが重要である。

(2) 対策立案

課題を「来訪者の継続的な関わり」としたのを受けて、まちベンチの運営スタッフと、9 月 8 日事前検討、9 月 15 日具体案検討、9 月 22 日実行計画作成のプロセス(図 6)を通して、課題を解消するための対策を検討した。

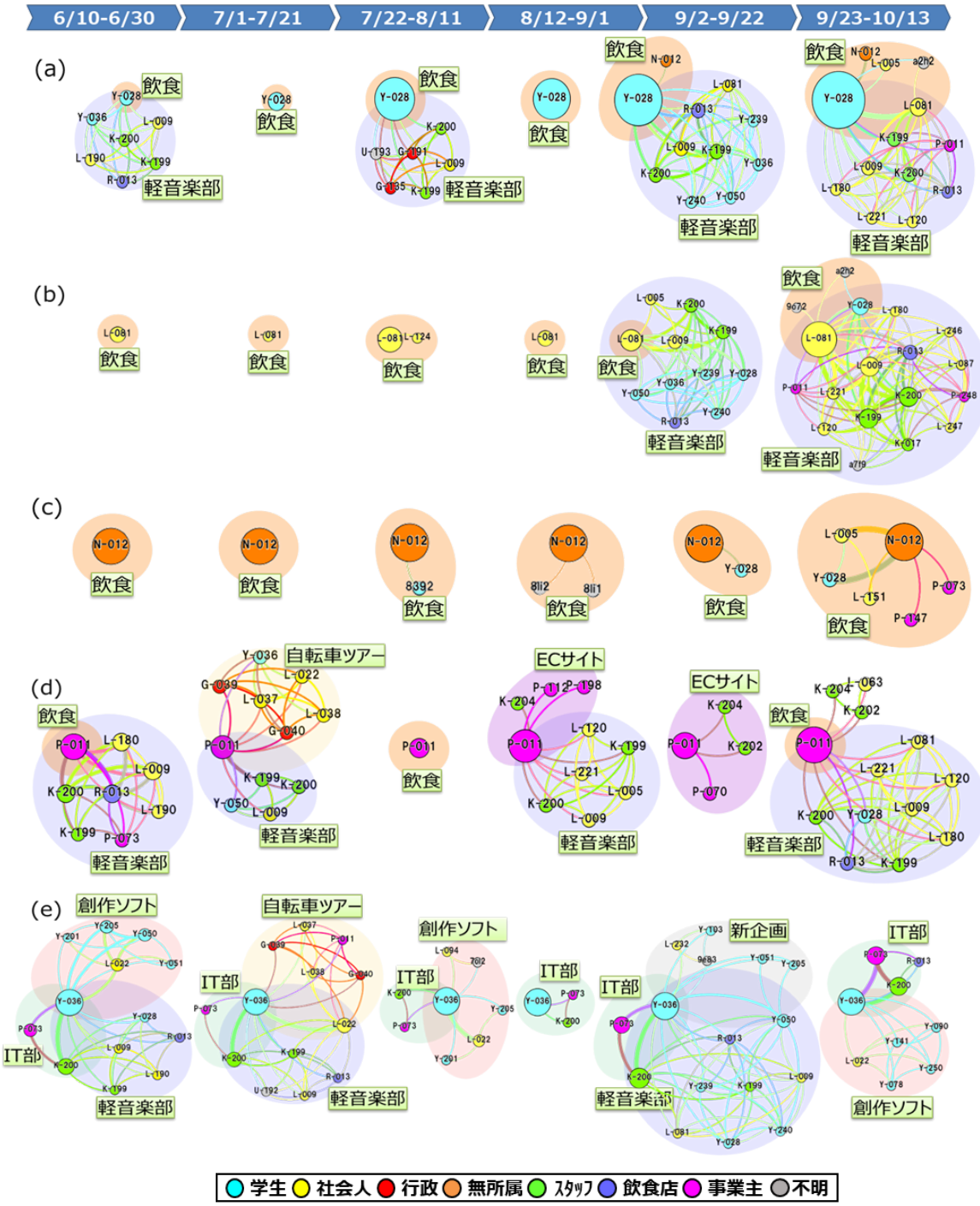


図 10 注目すべき来訪者に関わりを示すネットワーク図 (a)Y-028、(b)L-081、(c)N-012、(d)P-011、(e)Y-036

a) 事前検討(9/8)

既に継続的に関わっている 3 人の来訪者を具体例として振り返り、来訪のきっかけ、運営スタッフの対応、来訪者の関わりの変化をまちベンチの運営スタッフ間で共有した。

1) 具体例 1

この来訪者が地域の広報誌のまちベンチの記事を見て来訪した際、運営スタッフが声をかけて対応した。その後、来訪者の相談に応じて、運営スタッフはアドバイスをし、様々な活動への参加を支えた。その結果、来訪者は積極的な提案、実行を行うキーパーソンに成長した。

2) 具体例 2

この来訪者は、よくソフトクリームを食べに来ており、カウンターに座ることも多かったので、会話するようになった。まちベンチの運営スタッフは、来訪者と話しているうちに、来訪者がまちづくりに関心があること、カメラに専門性があることなどに気が付き、撮影を依頼することにした。地元企業・人材の活用で良いものを作る協力体制につながっている。

3) 具体例 3

この来訪者は運営スタッフの友人で月 1 回程度来訪し、カウンターで話すことが多かった。この来訪者はまちベンチ

でカモケンラボの代表や市民団体の代表と話し、感化を受けていた。また、一緒に自転車でまちを回るうちに、地元の魅力を再認識し、地元で就職を探すようになった。

b) 具体案の検討

9 月 8 日の議論を受けて、根本的な解決にもつながり、すぐにできて、インパクトの高いネクストステップのための具体案を、まちベンチの運営スタッフとともに、話し合った。その結果、以下の 3 つの案が提案された。

1) 来訪者へのインタビュー

既に継続的に参加している来訪者にインタビューすることで、事前検討で得られた継続的に関わることに関する知見を検証するとともに、来訪者から見たまちベンチの価値、魅力、期待などを明らかにする。

2) 原点回帰イベント

まちベンチの開設時の目的に立ち返って、まちベンチに関わる人々と話し合う原点回帰イベントを行うことで、まちベンチの目指す方向性を示す。これにより、新たな連携の可能性を模索する。

3) 来訪者とのコミュニケーションを進める仕掛けづくり

来訪者のカウンター席への誘導、まちベンチの運営スタッフの紹介文の掲示など、来訪者とまちベンチの運営スタッフとのコミュニケーションが進む仕掛けを作る。

c) 実行計画の作成

9 月 15 日の議論を受けて、来訪者インタビューと原点回帰イベントの実行計画をまちベンチの運営スタッフと話し合い、来訪者インタビューと原点回帰イベントを優先事項として以下のように実施することとなった。

1) 来訪者インタビュー

まちベンチに継続的に関わりをもつ来訪者に、カモケンラボ、田園社会イニシアティブ、当所の 3 社共同で、インタビューを行う。期日は 10 月中旬までに実施。来訪者 5 名ほどを予定。

2) 原点回帰イベント

毎月第 4 金曜日に月 1 回のペースでまちベンチで実施、リモートでもつなぐ。毎回テーマを決め、ゲストも呼び対話形式で実施する。録画データを公開し、後日閲覧も可能とする。

5. 対策実施と波及効果

(1) 来訪者インタビュー

既に継続的に関わっている来訪者 5 名(学生、個人事業主、行政職員、在住外国人、不動産業者)からインタビューした内容を、質問項目ごとにまとめた。

a) きっかけ

調査対象者 5 名がまちベンチに関わるきっかけは、設立前からカモケンラボの代表者や運営スタッフと面識があった人が 3 名、地域情報誌に掲載されたまちベンチの記事を読んだ人 1 名で、気になってぶらっと立ち寄った人 1 名であった。広報でまちベンチの活動内容を知って来訪する人が少なく、在住外国人から、「何をやっているところか、わからなかった」という発言もあり、まちベンチの活動内容を、十分に周りに伝えていくことが重要であることがわかった。

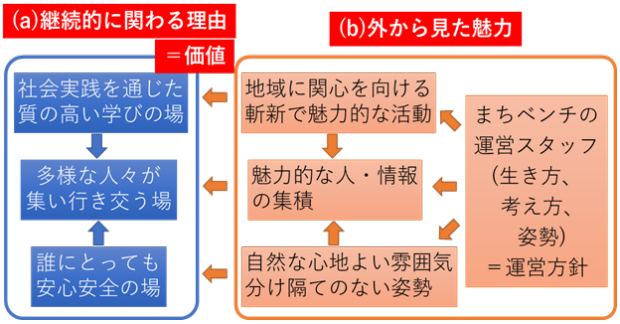


図 11 まちベンチに関する (a)継続的に関わる理由、(b)外から見た魅力

b) 継続的に関わる理由

調査参加者がまちベンチに継続的に関わる理由は、次の 3 つに分類できる (図 11(a))。

1) 社会実践を通じた質の高い学びの場

学生は、まちベンチに集う人の支えもあり、まちづくりの実践を通して自信を深めている。また、行政職員は、まちベンチで行われる活動の質の高さを評価しており、補完しあえる協働相手と認めている。不動産業者も新しい知見をもたらしてくれると評価している。

2) 多様な人々が集い行き交う場

調査参加者 5 名のうち、在住外国人を除く 4 名が、運営スタッフをはじめ、まちベンチに集う人はまちづくりに見識をもち、魅力的な人が多いと評価している。

3) 誰にとっても安心安全な場

在住外国人は、外国人と日本人の壁がなく、穏やかな感じがすると評価している。学生、行政職員も WELCOME な雰囲気がするとしている。

これらは、まちベンチの価値と言えるもの(図 11)であり、既に継続的にまちベンチに関わっている来訪者は、これらのまちベンチの価値に惹かれ来訪しているものと考えられる。

c) 外から見た魅力

調査対象者が述べたまちベンチの魅力をまとめると、以下の 4 つに分類できる(図 11(b))。

1) 地域に関心を向ける斬新で魅力的な活動

行政職員は、「若者が地域の資源を取り入れ商品開発を行うなど社会実践を通じて地域のことを学ぶなど魅力的な活動が多い」と考えており、不動産業者も、魅力的な活動をしているとしている。

このような魅力的な活動を行うことで、「社会実践を通じた質の高い学びの場」が実現しているものと思われる。

2) 魅力的な人、情報の集積、相談できる環境

学生と個人事業主は、まちベンチには、まちづくりに関心

を持つ人や、多くの情報が集まっており、実践についての相談や意見交換ができ、関係性を広げていける環境を魅力としている。このような人や情報の集積、相談できる環境が、多様な人々が集い行き交う場につながっているものと思われる。

3) 自然で心地よい雰囲気、分け隔てのない姿勢

行政職員は、まちベンチの内装に木をふんだんに使って自然の優しい雰囲気が漂っていることを魅力として挙げ、また、在住外国人は、厳しいルールがなく、アットホームな場所としており、不動産業者もまちベンチを居場所と感じている人も少なくないとしている。

このような雰囲気と姿勢が、誰にとっても安心安全な場をつくりだしているものと思われる。

4) まちベンチの運営スタッフ

全ての調査参加者が、まちベンチの魅力として、運営スタッフを挙げ、運営スタッフの生き方、考え方、分け隔てなく受け止める姿勢を高く評価している。運営スタッフは、他の魅力にも深く関わっており、まちベンチの価値を作り出している。

d) 周囲からの期待

調査対象者が述べたまちベンチへの期待をまとめると、概ね、以下の 3 項目となる(図 12)。

1) 質の高い活動の継続

行政職員と個人事業主から、まちベンチの運営スタッフは外部での経験や知見が豊富であり、地域の人だけでは行えない斬新なイベントや市民を巻き込むイベントなどを続けてほしいとの期待が示された。

2) 地域間連携/交流

市内の地域間、美濃加茂市と加茂郡町村、美濃加茂市と都市部などの地域間連携への期待が示された。

3) 関係者間連携/交流

行政職員、在住外国人、不動産業者から、世代間連携、孤立しやすい人との連携、行政と地域住民との連携など、関係者間の連携や交流への期待が示された。

これらの周囲からの期待に応えることで、継続的にまちベンチやまちづくりに関わる人を増やせるものと思われる。

e) まちづくりに主体性をもって関わる来訪者の存在

質問項目にはなかったが、インタビューを通じて、まちベンチの運営スタッフの適切な対応により、まちづくりに主体性を持って関わる人々が増えていることがわかった。また、不動産業者や行政職員から連携に興味を示す意見も聞かれた。

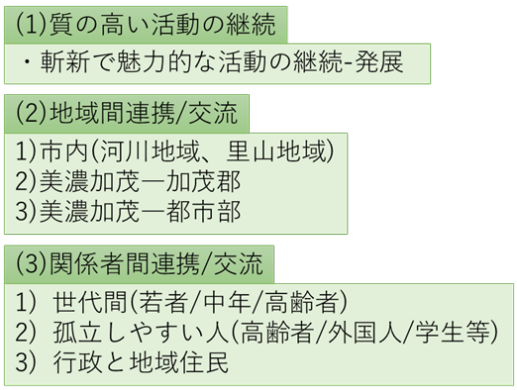


図 12 周囲からの期待

(2) 原点回帰イベント

まちベンチの開設時の目的に立ち返って、まちベンチに関わる人々と話し合う原点回帰イベントを、まちベンチにて、9 月と 10 月の 2 度開催した。それぞれのイベントは同時にYouTubeでも配信された。後日に視聴した人も含め、毎回 250 名前後の人が視聴し、まちベンチの可能性に関心を持つ人が多いことが確認できた。

a) 第 1 回 9 月 24 日実施

1) テーマ 「まちベンチ/カモケンラボの原点、代表の想い」

2) 内容

流域連携の可能性、地域経済の循環を目指した地域電力、地域の物産品を広く取り上げる地域商社など様々まちづくりの視点について、代表が持つ想いを語った。

3) ゲスト まちベンチの常連

4) 録画再生数 246 回

b) 第 2 回 10 月 22 日実施

1) テーマ 「まちベンチ/カモケンラボができること」

2) 内容

行政職員をゲストに迎え、地方行政との連携で、まちベンチ／カモケンラボにできることを話し合った。

3) ゲスト 行政職員

4) 録画再生数 259 回

(3) 対策立案・実施によって生じた新たなつながり

a) 創作ソフト活動(2021 年度夏)への波及効果

今回の一連のフィードバックでは、創作ソフト活動で関わった人と、その後の継続的な関わりにつながる関係を如何に築くかが課題とされた。これを受けて、対策立案後の 10 月 3 日に実施された創作ソフト活動の評価報告会では、初めてチーム間の交流を図るゲームが行われた。その後、異なるチームのメンバが初めて一緒にまちベンチに来訪しているのが観測されており(図 7(h))、チーム間をまたぐ新たな関係につながるものと期待される。

b) 創作ソフト活動(2021 年度冬)への波及効果

2021 年 12 月に始まった 2021 年度冬の創作ソフト活動では、以下に示す新たな関係を構築する試みが行われた。

1) 高校・大学からのチームを集めて実施。各チームに各教育機関の教諭や事務の方にフォローに入ってもらうことで、各教育機関間の信頼関係の醸成が試みられた。教育機関同士の教員レベルでの交流のきっかけになるものと期待できる。

2) 新作ソフトクリームの企画・広報のためのワークショップでは、チーム間でアドバイスしあうなど、チーム間の交流を積極的に図った。各チームのメンバからも、他のチームの人からのアドバイスが参考になったとの意見が多数聞かれた。

学校をまたぐ若者同士の交流のきっかけになるものと期待できる。

c) 来訪者インタビュー実施による波及効果

来訪者インタビューをきっかけに連携に興味を示した調査対象者（不動産業者や行政職員）との間で連携を模索する動きが始まり、新たな人のつながりもでき始めた。

(4) まちベンチの運営に与えた効果

a) 来訪者のネットワーク解析結果を共有した効果

来訪者日報を作成し、まちベンチに関わる人々のつながりを解析し、結果を共有する効果について、まちベンチの運営スタッフと議論した。その結果、以下のように、運営スタッフ間で情報共有が進み、来訪状況の理解、様々な活動連携の模索、運営スタッフの一体感の醸成などに効果が生まれていることがわかった。

1) 運営スタッフが、各自の担当日以外の来訪者の来訪状況を把握できるようになった。それによって、個々の来訪者がどのように過ごしてきたかを時系列に理解できるようになった(図 10)。
2) 運営スタッフが、担当していない活動の進捗状況が把握できる。それによって担当していない活動にも意識が向くようになり、担当の活動との連携を考えられるようになった。
3) 上記の情報共有を通して、運営スタッフ間の相互理解が進み、運営スタッフ全員が、ともに実施しているという意識が持てた。
4) 運営スタッフが、来訪者記録、特に、備考欄を記入することで、来訪者一人ひとりへの関心が増した。

b) 課題抽出・対策立案を共創プロセスで行う効果

来訪者のネットワーク解析結果をフィードバックしながら、課題抽出・対策立案を行う一連のプロセスについて、まちベンチの運営スタッフから、以下のような評価を得られた。十分に相手方の意見を取り入れた共創が有効に機能したものと考えられる。

1) 来訪者ネットワークの可視化をもとに、週を重ねるごとに議論が深まっていることを実感できた。
2) 毎回、実際にまちづくり事業を担当するスタッフの意見、その意見から考えられるキーワードやエッセンスを言語化し、説明を受けることができた。さらに、仮説立て、次の実施内容を検討して決めていくプロセスはやりやすかった。
3) 共同研究の資料が毎週アップデートされ、研究テーマや連続性がとても分かりやすいと思った。

6. まとめ

まちベンチに関わる人々のネットワーク解析結果を、運営スタッフにフィードバックして共創することが、事業の課題抽出、対策立案・実施に有効に働くことがわかった、また、得られた知見を活かして、対策立案・実施後に、新たな関係を構築する試みが行われたことがわかった。

1) 関わる人々のつながりの推移を共有することにより、創作ソフト活動などでまちベンチでの活動に初めて関わった人に継続してまちベンチに関わり続けてもらうことが課題であるという共通認識を得ることができた。
2) まちベンチの運営スタッフとの共創により、継続的に関わる人を増やす対策として、既に継続的に関わっている「来訪者へのインタビュー」とまちベンチの可能性を PR する「原点回帰イベント」の 2 つの対策を立案することができた。
3) 対策として行った来訪者へのインタビューを通して、まちベンチに継続的に関わっている人は、まちベンチの 3 つの価値、すなわち、「社会実践を通じた質の高い学びの場」「多様な人々が集い行き交う場」「誰にとっても安心安全な場」に惹かれて来訪していることがわかった。これらの強みを積極的に活用することで、継続的に関わる人を増やすことができるものと思われる。
4) また、きっかけや周囲からの期待の回答内容から、「まちベンチの活動内容の周知」「質の高い活動の継続」「地域内および地域間連携」を行うことも、継続的に関わる人を増やすことにつながるものと思われる。
5) インタビューを通じて、まちベンチの運営スタッフの適切な対応により、まちづくりに主体性を持って関わる人々が増えていることがわかった。
6) 対策として行った「原点回帰イベント」には、毎回 250 名前後の人が視聴し、まちベンチの可能性に関心を持つ人が多いことが確認できた。
7) 対策立案・実施後には、創作ソフト活動において、各教育機関との信頼関係醸成や参加するチーム間の交流強化など、新たな関係を構築する試みが行われていることがわかった。
8) 来訪者のネットワーク解析結果を共有する手法は、運営スタッフ間で情報共有を進め、各運営スタッフの来訪状況の理解促進、運営スタッフによる様々な活動連携の模索、運営スタッフの一体感の醸成など、様々な効果があった。
9) 来訪者インタビューをきっかけに連携に興味を示した調査対象者（不動産業者や行政職員）との間で連携を模索する動きが始まり、新たな人のつながりもでき始めた。
10) 来訪者のネットワーク解析結果をフィードバックしながら、課題抽出・対策立案を行う一連のプロセスは、十分に相手方の意見を取り入れた共創が有効に機能したものと考えられる。

以上から、まちづくり事業に関わる人々のネットワーク解析結果をフィードバックし、事業に関わる人々とともに、課題抽出と対策立案・実施を行う共創プロセスが、まちづくり拠点の活性化に寄与できることを実証できたものと考える。

参考文献

[1] 総務省統計局 人口推計(2022 年(令和 4 年)10 月 1 日現在)結果の概要、引用日 2023 年 9 月 26 日. https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2022np/pdf/2022gaiyou.pdf

[2] 総務省統計局 住民基本台帳人口移動報告 年報 2022 年、引用日 2023 年 9 月 26 日. https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?tclass=000001137121&cycle=7&year=20220

[3] 依藤光代, 松村暢彦:地方都市の商店街活性化におけるまちづくりの担い手の継承とその要因に関する研究ー水木しげるロードをケーススタディとしてー, 都市計画論文集, Vol.46, No.3, pp.487-492, 2011.

[4] 滑川 達, 田村 聡子, 山中 英生, 澤田 俊明, 花岡 史恵:市民組織育成を目的とした市民参加型プロセスの基礎分析 小松島みなとまちづくりを事例として, 建設マネジメント研究論文集, Vol.12, pp.27-38, 2005.

[5] 松村暢彦, 松浦洋平 : マルチパートナーシップ型交通まちづくり活動における主体間の関係性, 土木計画学研究・論文集, Vol.27, No.1, pp.183-195, 2007.

[6] 松村暢彦, 尾田洋平 : 行政職員のパーソナルネットワークとまちづくり基礎力の関連性, 土木学会論文集 D3, Vol.68, No.5, pp.I_197-I_206, 2012.

[7] 依藤光代, 松村暢彦:生駒駅前商店街における中心市街地活性化の運営の変遷と継承の要因に関する研究, 土木学会論文集 D3, Vol.69, No.5, pp.I_363-I_372, 2013.

[8] 堀口拓治, 出村嘉史:商店街活動の連鎖的展開をもたらす人と組織のネットワークの構造的特徴 岐阜市柳ヶ瀬及び美殿町商店街を対象として, 都市計画論文集, VoI.55, No.3, pp.1386-1393, 2020.

[9] 龍田成人, 牧野玲子, 稲垣優子, 大瀬佳之, 加藤慎康, 楢木隆彦:人々のつながりに着目したまちづくり事業の活性化要因の解析 (1)SNS 記事からの情報収集と人々のつながりの可視化, 土木計画学研究・講演集, Vol.66, 58-02, 2022

[10] 美濃加茂市 地域活性化スクールプロジェクト「冬こそ食べたいソフトクリーム」報告書、引用日 2023 年 9 月 26 日. https://www.city.minokamo.gifu.jp/temp2/hp/99/2021020515573 4/冬ソフト開催結果 1.pdf

[11]美濃加茂市 地域活性化スクールプロジェクト「夏限定!新作ソフトクリームを売りだそう」報告書、引用日 2023 年 9 月 26 日. https://www.city.minokamo.gifu.jp/temp2/hp/99/202106 17163954/結果発表会 1003.pdf

(? 受付)

ANALYSIS OF THE REVITALIZATION FACTORS OF COMMINITY DEVELOPMENT PROJECTS FOCUSING ON PEOPLE'S CONNECTIONS
(2) APPLICATION FOR COMMUNITY SPACE AND PLANNING FOR IMPROVEMENT

Narihito TATSUDA, Reiko MAKINO, Yuko INAGAKI, Takuya KIKUCHI, Takahiro KONDO, Shinyasu KATO and Takahiko NARAKI